

# 学習意欲向上を促す取組

－ノート指導から家庭学習へ－

千葉県立 ○○○○ 高等学校 ○○ ○○ (数学科)

## 1 はじめに

OECD（経済協力開発機構）のPISA調査をはじめとする各種の調査の結果によると、我が国の児童・生徒の課題として、学習意欲・学習習慣・生活習慣や自分への自信の欠如等が現在の教育課題としてあげられている。

一方、平成21年3月、学力の重要な3つの要素「基礎的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の能力の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」を基本的な考え方として、また「生きる力」をより一層育むことを目指し学習指導要領が改訂された。

そして、高等学校数学科においても、「数学的活動を通して、数学における基本的な概念や原理・法則についての理解を深め、事象を数学的に考察し表現する能力を高め、創造性の基礎を培うとともに、数学のよさを認識し、それらを積極的に活用して数学的論拠に基づいて判断する態度を育てる。」という目標のもと、「数学的活動を通して基礎的・基本的な知識および技能の活用を図る学習活動」や「言語活動の充実」等が授業において求められている。

しかしながら、現在の勤務校においては、家庭での学習習慣がほとんどなく、いわゆる受け身で授業を受けている生徒も少なくない。一方で、教員の接し方によっては期待に応えようという姿勢を見せる生徒も多い。そのため、生徒が主体的に数学を学ぼうとする意欲を高める工夫を常日頃から考えていた。

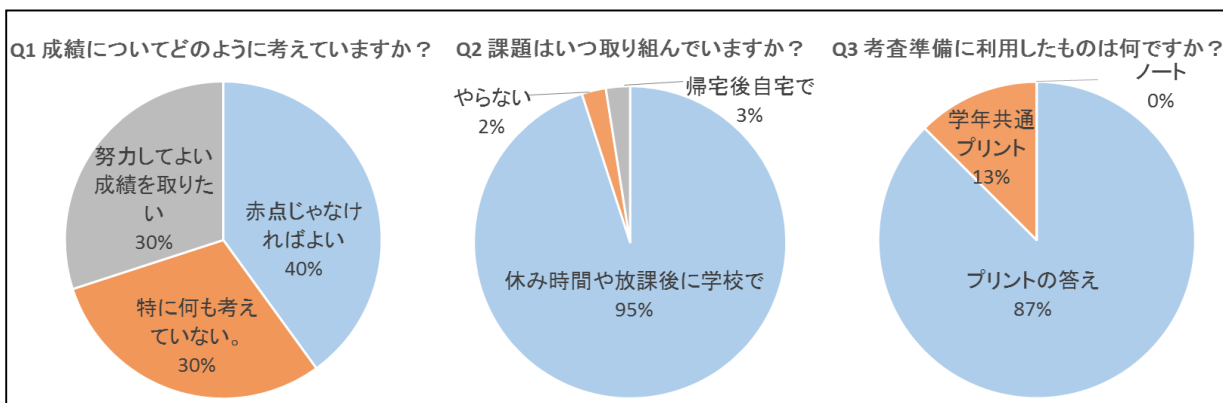
これらのことから、本校の生徒の実態に合わせ、「基礎的な知識・技能の習得」と「学習意欲の喚起」を図り、「出席する授業」から「参加する授業」を目標として、生徒が普段の授業を積極的に取り組む姿勢を育成させる授業実践を行うこととした。

## 2 現状把握と主題設定の理由

研究を始めるにあたり、平成25年5月末（第1学期中間考査後、各クラス最初の授業）に2年生3クラス121名を対象に、現状を把握するためのアンケート調査を実施した（図1）。

### (1) アンケート結果

図1 現状把握のアンケート



## (2) 学習の様子と提出物の様子（ノート及びプリント）

### ア 学習の様子

本校では、授業時に教科書・ノートを準備し、静かに授業を受ける生徒が多い。しかし、自ら積極的に学ぼうという意欲を持っている生徒は少ない。そのため、生徒の多くは少し難易度の上昇した問題演習になると既習事項とを結び付けて考えることができず、問題への取組を諦めてしまう生徒が多い。授業時の問題演習では、自ら問題に取り組むというよりむしろ教員の解答の解説を待っているという生徒が多く見受けられる。

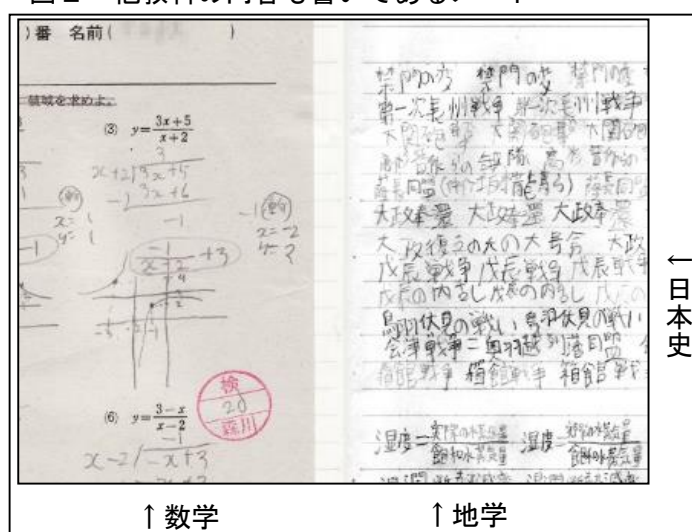
また、学校で配付される副教材以外に学習参考書等を購入して、更に深く学習する生徒はほとんどいない。そのため、本校の多くの生徒は、教科書・ノート・副教材・配付されたプリントのみで数学を学んでいる。

### イ ノート

生徒個々のノートの状況を把握するため、1学期の中間考査時に、ノートの提出を指示し、提出されたノートの内容を確認した。板書内容を写すこともノートの役割の一つであるが、大半のノートは、過去の授業内容を振り返ることが出来るようなノートではなかった。例えば、**図2**のように一つのノートに複数の授業内容が書かれているようなノートがそれにあたる。他にもふさわしくないノートの例として、次のようなものがあった。

- ・式や公式が正確に書かれていない。
- ・途中で他教科の授業内容が入っている。
- ・時系列に整っていない。
- ・板書を正確に写すことが出来ていない。
- ・途中過程の計算等が大きく抜けており、問題と解のみしか、記入されていない。
- ・数式の文字や数字が途中で別の文字や数字に変わっている。

図2 他教科の内容も書いてあるノート



### ウ 配付したプリントの提出状況と内容

本校数学科では、授業で取り上げた内容について、考査前に単元のまとめや定期考査対策として4枚から6枚の演習プリントを授業で配付し、生徒が学習内容の振り返りを行えるように演習させている。それらのプリントもノートと一緒に1学期の中間考査時に提出を指示した。

プリントを提出した生徒は、全体の約7割であった。プリントについてもノートと同様、様々であった。例えば、自分で取り組んでいるもの、提出のために模範解答をただ写しているもの、友人のプリントを写したもの、提出間際に模範解答を写し文字等が判別できないもの等である。

また、考査対策のプリントであるにも関わらず、演習プリントを紛失してしまう生徒も少なからずいた。ほとんど取組の跡がみられず、白紙に近い状態のプリントを提出する生徒が全体の約2割に見受けられた。

### (3) アンケート結果と授業や提出物の様子からの考察

図1にある「Q1 成績についてどのように考えていますか」のアンケート結果が本校生徒の学習意欲面の特徴を表している。すなわち、約70%の生徒が、「努力して、よい成績をとりたい」とは思っておらず、成績について「赤点でなければよい」という考えを持っているということである。

このような状況がうまれてしまう要因の一つは、生徒が数学の授業や学習に対して目標が持てずにいることにあったと考えた。そこで、生徒が授業時に自ら取り組むべきことを明確に示すことで、学習に対する消極的な姿勢を意欲的な姿勢に変えていくことが大切であると考え、研究を進めることとした。

### (4) 主題の設定

授業への取組を意欲的な姿勢に変化させるためには、学習意欲の向上を促すことが重要である。そこで、次に挙げる①～③をしっかりと徹底させることを柱にして、授業研究を行っていくこととした。

- ① 生徒がノートを確実にとり、後の学習の参考にできるようにする。
- ② 問題演習に主体的に取り組む姿勢を生徒に身に付けさせる。
- ③ 授業外で自ら学ぶ家庭学習を促す取組。

## 3 研究実践1 ～ノート指導の徹底と問題演習の取組～

授業は「出席する」だけでなく、積極的に「参加する」態度を養うことが大切である。最初の取組として、板書をノートに正確に写してから演習プリントに取り組むという決まった手順を繰り返し指導することから始めた。基本を定着させることが、生徒の学習意欲の喚起には必要である。基礎・基本をしっかりと定着することで、より学んでいこうという態度が養われると考えた。

### (1) 実践方法

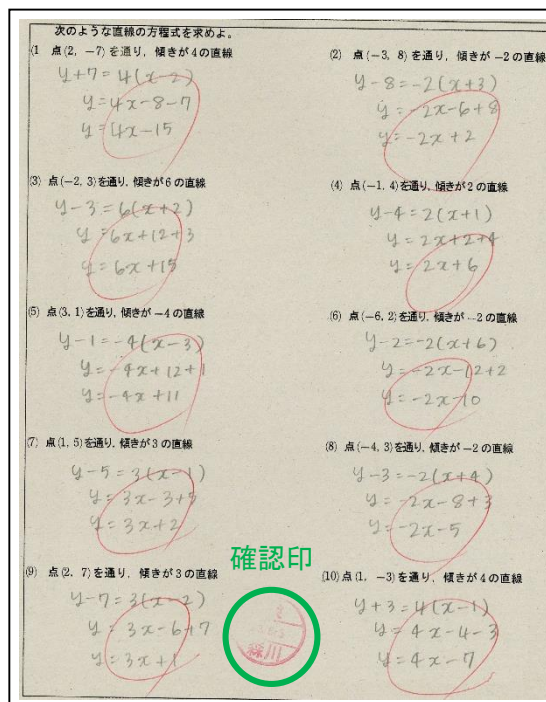
#### ア ノート指導の徹底 I

板書を正確に写すことを徹底させるために、毎時間クラス全員のノートを教員が点検し、合格者のノートには確認印を押印することとした。

#### イ プリント演習の方法

正確に写されたノートを見ながら、同じ解法で解ける演習プリントを用意し、問題に取り組ませる。このとき、問題に自ら取り組むという姿勢を前向きに評価することが大切である。この前向きな評価により、生徒は授業の達成感を感じることができるからである。したがって、解き終わったら正解数に関わらず、確認印を押印した(図3)。

図3 プリント演習の確認印



## ウ ノートとプリントの管理と評価

図4 チェック用紙

考查ごとにノートと演習プリントの確認印の総数をチェック用紙に記入し、ノートとともに提出させた(図4)。

チェック用紙は、自己評価を促す工夫をした。自分の確認印の数だけでなく、クラスで一番確認印を多くもらった生徒(取組の良かった生徒)の確認印の数を記入させた。また、自分自身の出欠状況を確認させた上で、言語活動を充実させる観点から授業への改善点等を文章で記入させた。生徒に自分の授業態度を振り返らせ、更に一歩進んだ取組に繋げることができると考えたからである。個々の生徒を見守る視点を持ち、チェック用紙を返却する際には、生徒への簡単なアドバイスを記入し、教員から見た改善点を伝えるようにした。

組 氏名							
スタンプ数	20	欠席	4	遅刻	0	公文	0
最高数	28	ノート評価	+				
最高数と差があるのはなぜだと思いますか? 来学期の改善点を記入してください。							
提出していないプリントがあったから。次回よりプリントをやり直し。							
ノート評価の方法が変わりましたが、どのように感じていますか?							
1 見やすくなった 2 面倒くさい 3 授業に集中できるようになった 4 特に変わらない							
今より復習しやすい(原やすい)ノートにするためには、どのように改善したらよいと思いますか?							
(方程式)と練習問題を区別する。 練習問題の1冊目までを覚える。 (原)の音階が目立つように音か赤で囲む。と田も念々							

### (2) 指導過程の注意点

研究実践1を進めていくなかで、生徒の様子から今後の授業で注意すべき点や改善しなければならぬと感じた点は、以下のとおりである。

ア 毎時間のノート指導の際に、間違って書き写す、最後まで写しきれていない等、どれが解答であるかが理解できていない生徒がいることが確認できた。そのため、不十分な箇所や写し間違っている箇所を具体的に指摘し、必ずその日のうちに指導するようにした。

イ ノートの確認印は、その授業時間の生徒の取組を評価するため、必ず授業時間内に押印するようにした。振り返りも授業の一部と考えたからである。演習プリントについては、取り組む時間に個人差があり、授業時間内に終わらない生徒もいたため、その場合には、取組を評価する期限を次回授業開始前までにした。

ウ 演習プリントは終了後必ずノートに貼り付けさせるよう指導し、生徒がプリントを紛失せず管理できるようにした。その日の授業内容のページの隣のページに1枚1ページを使用して貼り付けさせた。演習プリントだけをまとめて貼り付けることやプリント同士を重ねて貼り付けることがないように指導し、ノートと演習プリントの内容を関連づけられるようにすることで、授業内容の確認が容易にできるようにした。

エ 生徒が主に使用しているノートはB5版である。そこで、周囲を切り取らずにノートに貼ることができるサイズのA5版を演習プリントのサイズとした。

オ 演習プリントの難易度は授業で取り扱った問題と同レベルとした。また、問題数はクラスの6割～7割が授業時間内に取り組める量を設定し作成した。

### (3) 生徒の状況と変化

#### ア ノート

実施当初は毎時間ノートを点検されることを面倒だと感じている生徒が見られた。しかし、回を重ねるごとに授業終了時に点検があることが当然のようになり、クラス全体にノート点

検を受け入れる雰囲気が出た。非常に見やすく整理され、自分なりに工夫してノートをとめる生徒が徐々に増えてきた。したがって、以前よりは、自分のノートを演習プリントに取り組む際に参考にしていく習慣をつけさせることができた。

一方で、ノートに演習プリントを重ねて貼り付けたり、自分の書いた文字の上に演習プリントを貼り付けたりするなど、振り返ったときに復習しづらいのではないかと思われるノートがある等、かなりの個人差が見られた。そのため、解りやすくまとめられている生徒のノートを見本に提示する等の工夫・改善が必要であると感じた。

## イ 演習プリント

演習プリントに取り組む場面で、自分の出した解答に自信がなく、そのあとの問題に進めない生徒が見られた。その際、プリントを早く終えた生徒が、プリントの取組が不十分な生徒に教えるような場面があった。その結果、理解が不十分な箇所や疑問点がある生徒は、授業時間内に解決できるようになった。

しかし、授業時間内に演習プリントが終わらず、提出できない生徒も数名いた。このような生徒に対しては、チェック用紙の提出の際に、改善点として丁寧にアドバイスし、次回からの提出を促した。

### (4) 1学期を終えてのアンケートの実施と結果、および考察

従前はノート提出を定期考査時だけ行っていた。今回の研究にあたり、毎時間の授業後にノートを提出させ、確認することにした。そこで、1学期末考査後、このことに対する自由記述形式のアンケート調査を行った。

生徒からのコメントは、概ね前向きな意見が寄せられ、否定的な意見はごく一部であった。主な意見は、次のとおりである。

前向きな意見

- ・やる気が出る。
- ・集中できる。
- ・面倒だが前より一生懸命取り組めるようになった。
- ・学校を休んだ次の時間でも頑張ろうという気持ちになる。
- ・休まないようにしようと思う。

否定的な意見

- ・ノートを毎時間チェックされるのは、面倒である。

「ノートを確実に書き写す」という単純な作業ではあるが、生徒が授業で最低限やるべきことを明確にし、ノートの状況を毎時間点検することで、多くの生徒が授業に目的意識を持って参加するようになった。このことから、具体的な指示を出して、生徒をきめ細やかに指導していくことが大切であると改めて感じた。

## 4 研究実践2 ～ノートの工夫とグループ学習～

1学期の実践から、改めて生徒自らが考え、学習に取り組む姿勢を身に付けることが重要であると感じた。そこで、授業時の板書内容をそのまま写すだけでなく、自分なりに見やすく復習しやすいノート作りを生徒自身ができるように実践を行っていくこととした。

### (1) 実践方法

#### ア ノート指導の徹底Ⅱ

2学期は、授業時間ごとのノートの点検と演習プリントの点検を継続しながら、自らの学

習に利用できる、つまり参考書と同等の機能を持ったノート作りを生徒自身に取り組みさせることを促すこととした。

## イ 問題演習の方法を変化させる

問題演習の際、自分の答えがあっているかどうか気がになり、その後の問題になかなか進めない生徒が見受けられた。そこで、演習問題の最終的な答えを演習プリント配付時に提示し、答え合わせをしながら問題演習に取り組めるようにした。

また、**研究実践1**において演習プリントを授業時間内に終えた生徒が、周囲の生徒に説明する等の行動が見られるようになった。このことを活かして、ペアやグループ等を作らせながら複数で問題演習に取り組むことにより、お互いが理解度を高めるような授業展開も取り入れるようにした。

## (2) 指導過程の注意点

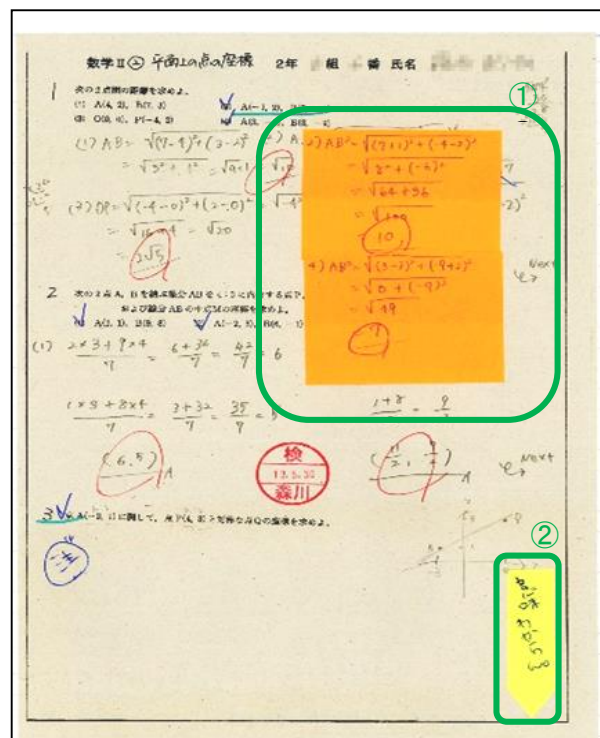
### ア 参考ノートの回覧

ノートの右端や付箋を利用して、重要事項や注意点などをまとめ、工夫してノート作りをしている生徒が見られた。そこで、工夫しているノートを手本として他の生徒に回覧し、よりよいノート作りの「きっかけ」となる指導を行った。

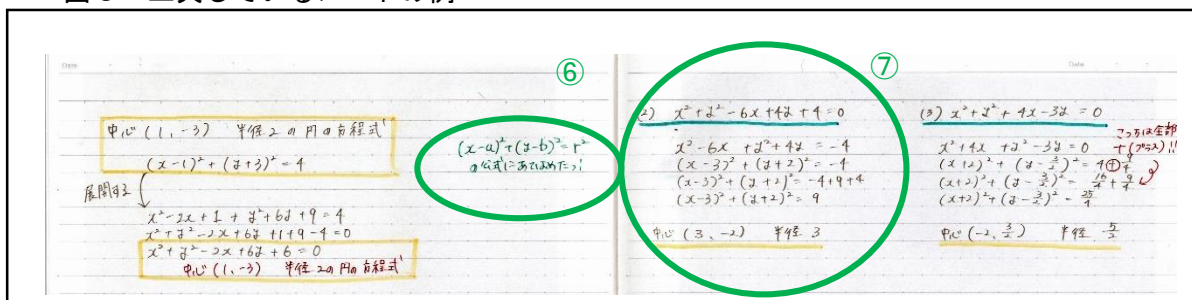
**図5**、**図6**のように、教員が工夫していると感じた実際の生徒のノートや演習プリントは、次のようなものである。

**図5 工夫している演習プリントの例**

- ①間違った問題を付箋に解きなおし、ノートに貼ってある。
- ②解けなかった問題に対し付箋を使って目立たせる。
- ③必要な公式を付箋に記入して貼り付ける。
- ④その日のノートのページの隣に演習プリントが貼られており、あとから見直しが行いやすいように整理されている。
- ⑤ノートの右端に欄外を設け、授業中の解説の中で大切だと思ったことを書き留めておき、あとで確認しやすくしてある。
- ⑥口頭で伝えたことをメモしている。
- ⑦問題と解答を必ず決まった色分けをしている。(自分なりのルールを決めてノートを作っている。)



**図6 工夫しているノートの例**



## イ グループでの学習

個々のノート作りの工夫により学習内容を定着させることを促してきたが、他の生徒と協力し合いながら学習することで、より学習内容を定着させたいと考えた。そこで、授業時間中の10分間、及び授業時間50分間すべてを使った2つの方法のグループ学習を取り入れて演習プリントに取り組みさせた。

グループについては、相談しやすい雰囲気を作るため、グループを構成する人数の固定や限定をせず、机を寄せあうことによりそれぞれが周りの者と自由に質問や相談ができるように工夫した。

### (3) 生徒の状況と変化

#### ア ノート

ノート作りについては、2学期に入り著しい変化があった。1学期の授業では、授業に集中できない、提出物等が提出されない等、授業への取組が消極的だった生徒がいた。しかし、このような生徒の多くが授業開始と同時にノートを写し始めるために、より早くノートを開き、筆記用具を持って授業を待つ等の細かい面での変化が見られた。また、毎時間のノート点検を確実に受けるようになり、学習環境をしっかりと整えたうえで授業に取り組もうとする生徒が多く見られるようになった。

#### イ グループ学習

授業時間中の10分間を使ったグループ学習では、最初机を寄せようとしめない生徒が一部見られた。そこで、そのような生徒には、わからない問題を周囲に相談するように促し、演習プリントに取り組みさせるようにした。また、これまでと同様に早く演習プリントが終わった生徒が周囲の生徒に解説する様子も見られた。

グループ学習により、周囲の生徒の影響を受け、授業への取組が消極的な多くの生徒が演習プリントに自主的に取り組もうとする様子が確認できた。

1時間の授業時間すべてを使ったグループ学習においては、単元復習プリントの演習を行ったが、自分のノートや演習プリントなどを利用して教えあったり、わからない問題を一緒に考えたりするなど活発に学習していた(図7)。

図7 グループ学習の様子



#### ウ 自主学習と副教材への取組

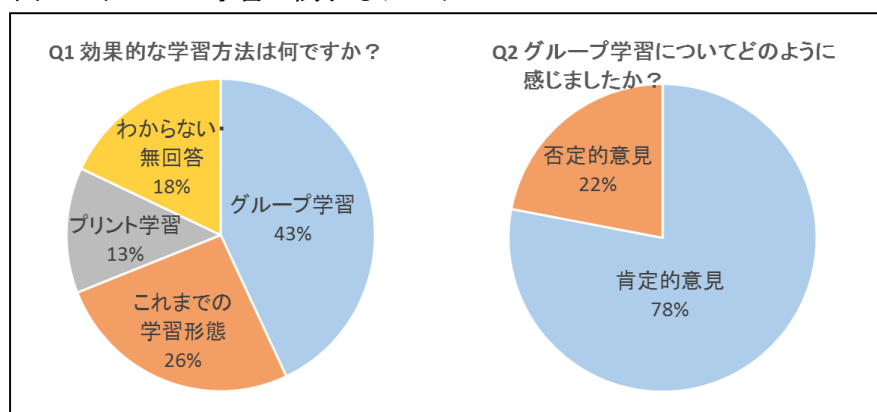
今回、様々な取組を行ったことにより、定期考査に向けて副教材を活用した生徒がいると思われた。そこで、副教材を活用したノート作りを行った生徒に対して、提出できるノートがあれば提出するように指示したところ、数名の生徒から副教材ノートの提出があった。提出されたノートは、提示された問題すべてに取り組んでいるものから一部だけ取り組んだものまで様々であり、内容には大きな差があった。

1 ページの図 1 からわかるように、今回の研究実践前にノートを用いて学習し、定期考査に臨む生徒は皆無であった。以前の生徒の考査対策は、演習プリントや単元プリントの見直し、試験対策プリントを利用した学習等、プリントを中心とした学習がほとんどであったことを考えると、定期考査の準備として副教材に取り組む様子が徐々に見られ、生徒の学習意欲の変化が感じられた。

#### (4) アンケートの実施とアンケート結果

2 学期末考査時に、グループ学習の効果を見るために図 8 のようなアンケートを行った。

図 8 グループ学習に関するアンケート



Q 2 におけるグループ学習の実施についての生徒の主な意見

肯定的な意見

- ・わからないところを一緒に考えることはいいと思った
- ・自分がわかっていなかったところが再確認できた
- ・他の人と会話しながら、知恵をしばって解いたことが楽しかった
- ・わからない所を聞いてわかったりするからとても良かった
- ・周り相談できて、教えあいができるからいいと思った 等

否定的な意見

- ・変わらない ・やりにくい ・一人で問題を解きたい 等

#### (5) アンケート結果及びその考察

アンケート結果から、グループ学習を取り入れたことは、多くの生徒にとって、学習への刺激になったことがわかる。グループ学習により、数学が得意な生徒も「教える」という立場で、また不得意な生徒も友人の考えを「聞いて考える」という立場で参加することができた。しかし、「グループ学習」を毎日のプリント学習の時間に取り入れることは、生徒がグループ学習の雰囲気慣れ、学習に対する集中力が落ち、逆効果になる雰囲気も同時に感じられた。今後は定期試験ごとに 2 時間程度のグループ学習を取り入れていくことが、学習への刺激となって効果的であると思われる。

### 5 研究実践 3 ～家庭学習への取組～

2 学期までに行ってきたノート指導と演習プリントの点検の取組は、生徒の学習意欲の喚起に有効であったと感じた。また、一部の生徒が自発的に副教材の問題にも取り組み始めたことから、日々の家庭学習を促す取組を行った。そのきっかけとして、授業開始時に前時の内容の小テストを実施し、その活用方法の工夫から始めた。



## (1) 実践方法

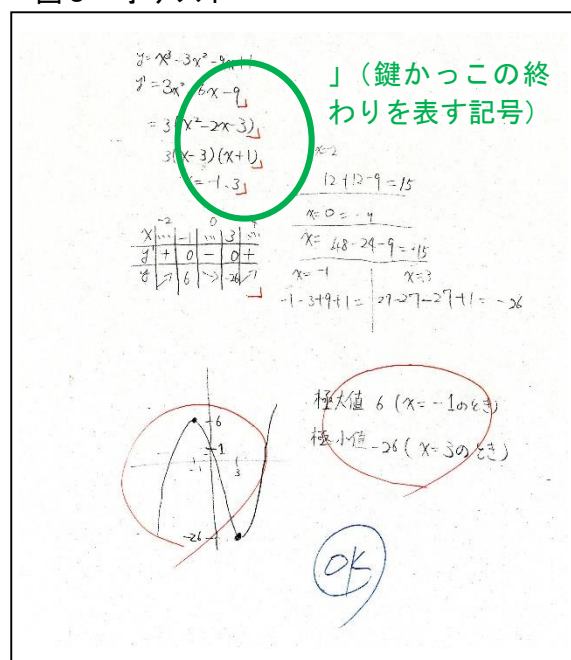
前時の授業で取り扱った問題1問～2問を復習を兼ね、授業開始後約10分間の小テストを行う。採点は生徒同士で答案を交換して採点する。生徒同士で採点することにより、途中式のミス等を発見することが、学習内容のより深い理解に繋がる。また、小テストを繰り返し実施することで、授業外での学習、すなわち生徒の家庭学習に繋がる可能性があると考えたからである。

## (2) 指導過程の注意点

模範解答は、教員が途中式を含め、簡単な解説や注意事項を加えながら、板書する。その際生徒は、途中式の段階ごとに“J”（鍵かっこの終わりを表す記号）をつけて、どこまでがまっているのかを確認させるようにした（図9）。

小テスト実施後はテストを回収し、途中式の不備や採点ミス等を教員が点検し、コメントを記入して返却した。

図9 小テスト



## (3) 生徒の様子と効果

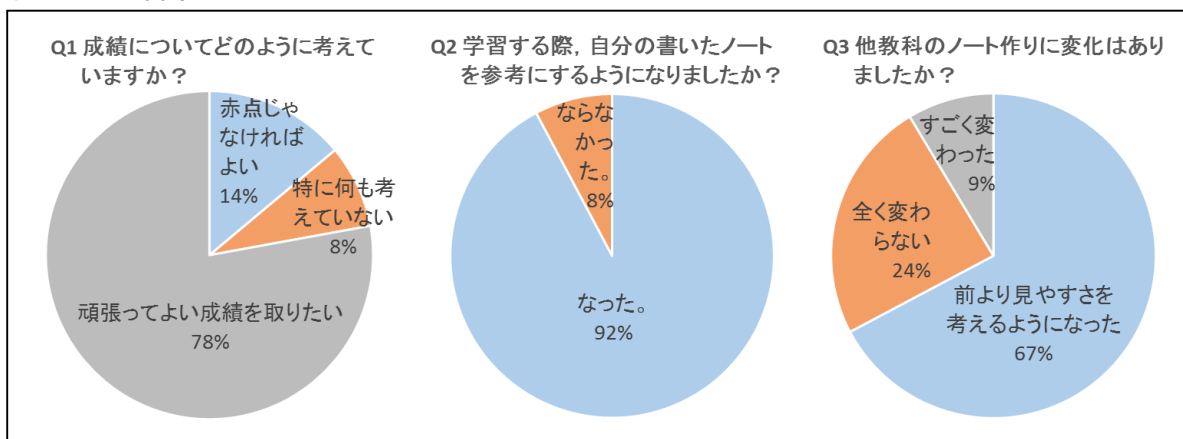
前時の授業で取り扱った問題を使用している小テストなので、意欲的な生徒は家庭学習で授業内容の確認を行い、学習意欲が乏しい生徒でも休み時間にノートを復習したり、友人にわからないところを質問したりする姿が見られるようになった。

また、小テストを行うことが前時の復習を兼ねることになり、スムーズに授業に入ることができるようになった。このことから生徒にとっても、教員にとっても小テストは有効な取組であった。

## (4) アンケートの実施と生徒の感想

学年末考査が終わり、1年間の授業のまとめとして図10のようなアンケート調査と自由記述形式のアンケート調査を行った。

図10 1年間のまとめのアンケート



生徒の主な感想（原文のまま）

- ・理解しようと努力できるようになった
- ・楽しいと思えるようになった
- ・テストに備えて家での自習をするようになった
- ・小テストがあったので家で勉強するようになった
- ・わからないところわかるまで取り組めるようになった

アンケート結果から、年度当初と比較して、数学の授業に対する意識が前向きに変化している様子が窺えた。また、小テストの実施が多くの子の家庭学習のきっかけとなったことも窺うことができた。

#### （５）アンケート結果についての考察

アンケート結果から特に生徒の意識が大きく変わったと感じたのが、成績に対する考えである。年度当初のアンケート結果と比較すると「よい成績を取りたい」と考えている生徒が約30%から78%に大幅に増加し、「成績について特になにも思わない」や「赤点じゃなければよい」と考えている生徒がそれぞれ30%から8%に、40%から14%へと大幅に減少し、生徒の意識が前向きな姿勢に変化していることがわかる。

そして、年度当初にはノートに対する意識が低かったが、他教科のノートにまで生徒の意識の変化が広がっている様子もアンケートの回答から窺うことができた。実際に、他教科の先生からも、「生徒が休み時間中に授業の準備を確実に行うようになった」や「ノートに付箋を使用する生徒が増えた」等、生徒の授業に臨む姿勢の変化やノート整理の工夫が見られるようになったとの感想が寄せられた。

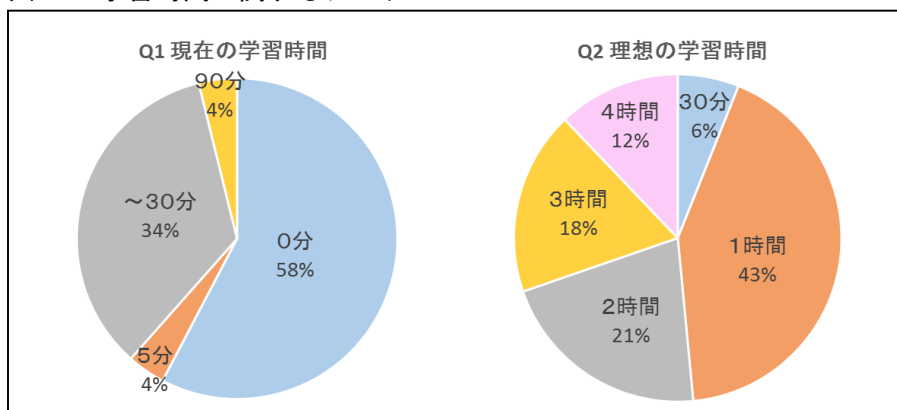
### 6 研究実践4 ～より意欲的な生徒への取組～

平成25年度の研究を通じて、数学に対して苦手意識を感じていた多くの生徒が、「ノート評価」や「小テスト」などに取り組むことによって、前向きに学習に取り組むようになり、テストに備えて家で復習をするようになる等、今までの取組が家庭学習まで繋がったことがアンケートの結果や生徒の感想、生徒の反応から実感することができた。研究実践4では、年度も変わり対象としている生徒も変わったため、今迄の授業への前向きな取組を維持しながら、向上心のある生徒に対してより実力をつけさせる取組を行うため、授業以外の進学希望者を対象とした補習で実践を行った。

#### （１）アンケートの実施

生徒の家庭学習の現状を把握するために3年生1クラス40名を対象にアンケート調査を実施した(図11)。

図11 学習時間に関するアンケート



学習時間の調査と共に家庭学習に取り組めない理由についても自由記述形式で調査した。家庭学習に取り組めない主な理由は、以下のとおりであった。

- ・部活があり、帰りが遅いから
- ・何をすればよいかわからない（目標がない）
- ・やる気がでない（だらだらしてしまう）
- ・自覚がない 等

## （２）アンケート結果についての考察

進学を控え、高校生活最後の集大成の学年であるにも関わらず、実際の家庭学習の時間は90分が1名いるだけでほとんどの生徒が0分～30分という状況であった。しかし、アンケートのQ2の結果から、94%以上の生徒の理想の家庭学習時間は、1時間以上と考えていることがわかり、家庭学習の必要性は感じているもののなかなか行動に移すことができない生徒が多いと感じた。

## （３）指導方法と実践

まず、生徒の学習に対する自覚を高めることが必要である。教員が生徒を指導するだけでは生徒自身の自覚を十分に高めることはできない。そこで、生徒に影響を与えるであろう友人に着目した。生徒にとっては、教員だけでなく、友人を含めた周囲からの影響も大きいと考えたからである。そこで、生徒同士でどうすれば家庭学習に取り組めるのかを考え、そのサポートを教員が行うことで効果を上げることとした。

本校の進路希望の状況を考え、学習に対して向上心があると考えられる生徒を対象に実践を行う。大学進学希望者に話し合いをさせ、家庭学習への取組のきっかけとなる事柄について考え、生徒同士で話し合う時間を設けた。その際に出てきた主な意見は以下のとおりである。

- ・家庭学習をした時間を表にする
- ・テストをして点数を発表する
- ・テストをして順位を発表する
- ・他の人と比較して、自分が少ないと焦る
- ・取り組んだ問題数を表にして発表する 等

生徒の話し合いの結果、「教員が生徒に取り組むべき問題を提示し、取り組んだ問題数を生徒同士が互いに発表して周囲の人がどのくらい頑張っているかを知ること、家庭学習に対するモチベーションを上げる。」という方法が一番効果的であるとの意見にまとまった。生徒の自覚を促す最良の方法はともに学ぶ生徒であるという結論に至ったのである。そこで、生徒が話し合いによりまとめた意見を参考にして次のような実践方法を考えた。

- ① 放課後に進学者を対象にした大学入試問題の演習と解説の補習授業を行う。
- ② 取り扱った問題と関連している問題集の番号を授業者が提示し、生徒は次回の補習までに問題を解いておく。
- ③ お互いの状況を生徒同士で確認する。

## （４）指導過程の注意点

ア 補習は5月下旬から行った。平常授業時は週1回程度、長期休業中は週2～3回程度のペースで行い、それぞれが希望する進学先の過去問題等を中心に取り扱った。補習参加者は14名であった。

イ 解説の詳しい問題集を生徒が購入し、家庭学習用に使用した。

図 12 チェック用紙

ウ 補習受講者同士の学びあいの観点から、お互いの状況を確認しやすくするための工夫を考えた。生徒自身が理想としている学習環境を支援するため、問題集の取組表を準備した。

問題集のすべての番号を印刷した表（チェック用紙）を準備し、補習開始当初、解き終わったら自分で色を塗るようにした（図 12）。取組表でチェックする際に、更に改善を加えて「簡単に解けた問題」「解説を見ながら解けた問題」「解説を見てもわからない問題」等、パターンを分けて色を塗るという使い方を紹介し、取り組ませた。

### (5) 生徒の様子

生徒は、わからない箇所を確認しながら真剣に補習に参加し、取り組んでいたが、家庭学習となると、問題が難しいため、最初のうちはなかなか思うように問題数がこなせない様子が見られた。しかし、補習の回数を重ねるにつれて、自力で解ける問題がそれぞれ増えていった。

夏季休業前になると、徐々に生徒個々の取組に差が見られるようになってきたため、補習を行う前にお互いの取組状況をチェック用紙で確認しあうようにした。

すると、これまで「やろうとは思ってはいるが、取り組めていない」生徒や「補習に時々欠席する」生徒から「次回までにはなんとか追いつきたい」等の言葉が聞かれ、多くの生徒が実行に移せるようになった。2学期始業式直前には、生徒同士に大きな取組の差もなく2学期を迎えることができた。

### (6) 考察

研究実践4については、クラス全体を対象とした実践ではなく、進学補習参加者という少人数を対象とした実践であった。

この実践を通じて、効果的な取り組み方を生徒自身に自ら考えさせ、教員がその援助をしていくことで、授業以外の学習である家庭学習を促すことができたと考えている。

2学期に入り、AO・推薦入試の時期を迎え、定期的に補習の時間を確保することは難しいものの、多くの生徒は夏季休業中の取組から継続して家庭学習を行っており、お互いに取組表を確認しあいながら、家庭学習に取り組んでいる。

## 7 おわりに

本研究では、意欲的、主体的に授業に取り組むことが難しい生徒に対して、学習意欲を喚起し、主体的に取り組む姿勢を育成する方法を検討し、実践してきた。ノートの取り方の指導と演習プリントの取組を柱として、生徒の様子の変化を見ながら実践方法を変化させ、約1年をかけて、授業への取組の改善から家庭学習の取組まで繋げることができた。

研究実践を行っていく中で留意したことは、目標とする生徒の姿に対して、確実に取り組ませたい事柄を明確にし、授業の形式を大きく変化させるのではなく、段階を追って少しずつ変化させ、改善を促していったことである。また、確実に取り組ませたい事柄に対しては、指導を徹底するようにした。

その結果、授業の雰囲気だけでなく、ホームルームの雰囲気や生徒指導の場面など様々な場面で、生徒とのよい関係を築くことができたと感じている。教科指導を充実させることが教員の仕事の全ての場面に繋がっていることを改めて実感することができた。

教員となって19年となり、この研究を通して、自己の授業への取組について改めて考える機会を頂いたことは、これまでの経験を振り返ることと今後の授業への姿勢について考える機会となり感謝しています。